



虹のかけ橋

第43号/令和元年9月

兵庫県立但馬やまびこの郷

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

予兆を見逃さず 早期に適切な対応を

不登校児童生徒への支援は、早期から行うことが重要であり、予兆への対応を含めた初期段階から情報を整理し、組織的・計画的な支援につなげる必要があります。

本年3月に当所が発行した「不登校未然防止リーフレット～新たな不登校を生まないために～」の中でも、次のように謳っています。

- ①学校として対応の指針をもつ
- ②チーム学校で対応する
　　担任一人で抱え込むのではなく誰がどんな働きかけをするか役割分担して支援する(右図)。
- ③虐待等を視野に入れて実情を正確に把握する



また、文部科学省から平成30年4月に、不登校児童生徒に加え、障害のある児童生徒及び日本語指導が必要な外国人児童生徒に対する支援計画を統合した参考様式の送付がありました。その中で、不登校児童生徒への対応例が示されていますので一部を紹介します。

【普段】教務日誌等で気になった児童生徒の情報を記録・保管

- ・学級担任等が日常観察の中で気になった児童生徒の状況(強みや課題等)を記録
- ・記録した情報を必要に応じて学校内で共有できるようにして保管・蓄積

【連続欠席3日目～】校内で情報共有 ※遅刻・欠席も加味

- ・養護教諭等が連続欠席3日目からの児童生徒をチェックし、管理職へ状況報告
- ・管理職を含め校内委員会等において組織的に欠席の原因や背景を把握
- ・今後の対応を検討するとともに引き続き家庭訪問を実施

【連続欠席7日目～】

- ・管理職、担任、対象分野の教員、養護教諭、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等が中心となりアセスメントを実施
- ・必要に応じて関係機関と協議し、組織的な支援計画を立案
- ・児童生徒本人にかかる全員で情報を共有し、役割分担を確認
- ・個人情報の取扱いについての確認 等

業務の適正化を図り、効果的な指導につなげる観点からも、組織的な対応が求められます。



「不登校未然防止リーフレット～新たな不登校を生まないために～」は、当所のホームページ内『調査研究』のコーナーに掲載していますので、ご活用下さい。

<http://www.t-yamabiko.asago.hyogo.jp/>

学校適応はどのように捉えられるのか ～児童生徒の学校適応感～

神戸大学大学院人間発達環境学研究科 准教授 齊藤 誠一

1. Aさんは学校適応しているか

X先生が担任しているクラスのAさんと個別面談をしている風景を思い浮かべて下さい。1学期を振り返って、X先生はAさんに「Aさんはクラスに友だちが多く、授業でも積極的に発言して、クラスの仕事も進んでてくれているよね。楽しく学校生活を送ってくれていて、先生は安心しているよ。この調子で2学期もがんばろうね」と伝えました。それを聞いてAさんは少しうれしそうな表情をしましたが、「でもね、私は先生が思っているほど学校が楽しいわけではないんです」とぽつりと答えたので、X先生は首をかしげてしましました。



ここでは、ひとまず学校適応を学校という環境の中で児童生徒が活躍できる場をもち、友人との関係も良好である状態としておきます。この点から見れば、X先生がAさんは学校適応していると判断していることに誤りはないといえます。しかし、Aさんは学校が楽しくないと言っており、自分では学校に適応しているとは思っていないようです。では、一体どちらが本当なのでしょうか。答えとしては、どちらも本当であると言えます。学校適応の定義から言えば、Aさんは学習、クラス活動のいずれでも活躍している居場所をもち、友人との絆も持っているので、X先生の認知からは学校適応していると判断できます。ところが、Aさん自身はそう感じていませんので、Aさんの学校適応についての感情、すなわち学校適応感はポジティブとは言えないのです。たとえば、Aさんによい子志向(過剰適応傾向)が強いとすると、教師、保護者、友人の期待を先取りし、その期待にそった行動をとるので、彼らからはポジティブに評価されますが、心はヘトヘトに疲れてしまっています。

2. Bさんは学校適応していないか

では、このような場合はどうでしょうか？X先生はクラスの中で孤立しているように見えるBさんのことが心配で、Bさんとの個別面談では「いつも昼休みは本を読んでいるけど、もう少し友だちと一緒に話したり、遊んだりしてはどうだろうか。友だちは大切だと思うけどなあ」と伝えました。それに対して、Bさんは「私は今のクラスが嫌ではないし、ちゃんと友だちはいます。でも、みんなみたいにいつもべたべたしているのが好きでないので、ひとりで本を読んでいるだけなんです」と答えました。Bさんは学校に適応していないのでしょうか？X先生から見れば、学校不適応かもしれません、Bさんの学校適応感はネガティブではないのです。

もうおわかりかと思いますが、教師が認知する学校適応と、その児童生徒がもつ学校適応感は異なることがあるということです。この両者の違いを理解することが児童生徒の学校適応を捉えるスタートといえます。これまで私たちは観察など外面からの情報で、児童生徒の学校適応を捉えることが多かったといえないでしょうか？たとえば、それまで一日も休まず、楽しそうにしていた子どもが突然学校に来られなくなり、教師も保護者も原因がわからず右往左往するといったことは、この不一致に気づいていなかつたことによるものと言えます。もちろん、日々の学校生活の様子から子どもたちの心を理解することは大切ですが、子どもたちの内面である本音をどれほど聞いてきたでしょうか。この意味で、学校適応という客観的状況だけでなく、学校適応感という子どもたちの“ナマ”的気持ちを知ることはとても重要であるといえます。つまり、学校適応は教師が認知する客観的学校適応と、児童生徒がもつ主観的学校適応感の両面から捉えることが必要であるといえます。

3. 学校適応をどう捉えるのか

基本的には、児童生徒との面接、児童生徒に書いてもらう作文、学校適応感を測る尺度などから学校適応感を捉えることができます。いずれの方法も一長一短がありますので、それぞれの特徴を理解して利用することが大切です。ここでは、短時間に多くの児童生徒の学校適応感を知る方法として、学校適応感を測る尺度を2つ紹介しておきます。古くは、大久保(2005)の「学校への適応感尺度」があり、①居場所の良さの感覚、②課題・目的の存在、③被信頼・受容感、④劣等感のなさ、の4つの下位尺度から構成されています。また、教育実践の場で使用されることが多いものとして、石井ら(2005)の「学校環境適応感尺度」をあげることができ、①生活満足感、②教師サポート、③友人サポート、④向社会的スキル、⑤非侵害的関係、⑥学習的適応、の6領域から構成されています。それぞれの学校適応感の定義に従い測定項目が作成されていますので、我々が考える学校適応感にマッチしたものを使用すればよいと思います。また、このほかにも多くの尺度が作成されていますので、Cinii(※)などで検索し、信頼性、妥当性を満足した確かな尺度を使用することをお勧めします。



※Cinii …国立情報学研究所が運営する学術情報データベース

4. 学校適応感はどう使えるのか

たとえば、『不登校未然防止リーフレット～新たな不登校を生まないために～』にも強調されているR(リサーチ)P D C Aサイクルにしたがって、児童生徒の学校適応を促進する教育的介入をするならば、まず現状を知ることが必要であり、その測定がRになります。その結果を踏まえて、具体的介入を考え(P)、実行した(D)後、Rで行った測定を再度行って効果検討(C)をし、介入の見直し(A)を行うことになります。つまり、Rで学校適応感を測定することで、これから行うべき教育的介入が明確になり、Cで再度測定することでその効果がわかるのです。この意味で、その教育的介入自体が現状に合った適切なものか、その介入は効果があったのかを保証していくことになり、経験だけに依存しないエビデンスに基づいた教育的介入ができる 것입니다。



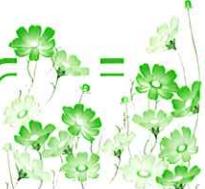
このように、学校適応感は児童生徒の学校生活全般に関わる感覚ですので、児童生徒の現実を知る上での有効な手がかりとなり、不登校未然防止のためだけでなく、教育的介入や教育活動を行う上で積極的に活用していただきたいと思います。

【引用文献】

- 石井真治・井上弥・沖林洋平・栗原慎二・神山貴弥(2009). 児童・生徒のための学校環境適応ガイドブック—学校適応の理論と実践—. 協同出版
大久保智生(2005). 青年の学校への適応感とその規定因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討. 教育心理学研究. 53, 307-319.

◆◆筆者紹介(齊藤 誠一／さいとう せいいち)◆◆

神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授。臨床活動:神戸市教育委員会スクールカウンセラー、神戸大学保健管理センターカウンセラー、姫路市総合教育センタースーパーバイザー。研究活動:思春期の生物学的発達と心理的適応／子の思春期発達と親の中年期発達の相互作用／放射線低線量被曝地域住民の心理的特徴



研修会より

令和元年度但馬やまびこの郷公開講座

5月22日(水)に「但馬やまびこの郷公開講座」を実施し、名城大学の曾山 和彦 教授に『不登校予防の「王道」～不登校ゼロを実現した大規模小・中学校の実践から～』と題して、お話をいただきました。



① 人が人になるには人が必要

人とのかかわり体験の不足が、自尊感情やソーシャルスキルの不足に繋がり、「不登校・いじめ・気になる子」の課題に直結している。最近は、家庭や地域で子どもを育てる力が弱まっている。学校は「人を人にする最後の砦」である。スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スクールロイヤー等と連携しながら、「チーム学校」として支援する必要がある。

② Slimple(Slim & Simple)プログラム

スリムペルとは、スリムとシンプルをつなぎ合わせた造語。単純でわかりやすい工程のプログラムの方が長続きする。また、安心感(ルール)があれば、友達とかかわりやすくなる。かかわりの糸(ふれあい)を結ぶことで、国がめざしている授業改革を進めることができる。

③ 子どもは遊ぶがごとし、私たち教師は…

私たち教師は、活動のねらいをもって子どもの前に立たなければならない。そして、適切な行動に対して価値付けをしていくことが必要である。ただし、「えらいね」「上手」「さすが」などのユーメッセージは、小さな子には有効だが中学生には必ずしも有効とは限らない。「ありがとう」「うれしいよ」「助かる」などのアイ・メッセージで伝えると効果的である。

④ 型を飽きさせない工夫～鳥取市立桜ヶ丘中学校の取組～

担当者を代える、子どもに質問内容のアイディアを聞く、全校オリエンテーションの機会を設けるなどの工夫をすることで、子どもが飽きずに取り組むことができる。なぜ短時間のグループアプローチをするのか、ねらいや目標とする姿を明確にし、学校全体で具体的なイメージを持つことが必要である。

*内容について詳しく知りたい方は、当所ホームページ内『指導者用資料』のコーナーをご参照ください。

不登校の子どもに学ぶ実践研修会 《参加者の声》



年次研修者を対象に、当所に入所している児童生徒とのかかわりを通して不登校について知見を深めるとともに、実践的な対応力や指導力の向上を図るための研修を実施しています。

そのふり返りから、受講者の意見や感想を紹介します。

- ・初めて出会う人とのかかわりには誰もが緊張するものであるからこそ、安心できる場を作り、受け入れる体制を整えることの大切さが分かった。
- ・不登校に繋がらないように、職員同士の共通理解や保護者との情報交換をしていきたい。学校全体がチームとして取り組むことが大事だと思った。
- ・今日、私に子どもたちがしてくれたように、今度は私も目の前にいる子どもを認め、受け入れていこうと思った。子どもの思いに耳を傾け、より良く進めるように一緒に考えたい。
- ・一人一人の名前を呼び、必ず毎日かかわる。小さなことでも「認め、褒める」ことを心がけていきたい。

